阪南市埋蔵文化財報告 34

玉田山２号墳発掘調査報告書

2004年

阪南市教育委員会

はしがき

昭和25年、「文化財保護法」が制定され、それまでは社寺や名勝、天然記念物のみを対象とした法律から、現在のような埋蔵文化財も保護対象とするようになりました。

当時の阪南市は昭和30年代半ばの大合併が行われる以前で、東鳥取村、尾崎町、西鳥取村、下荘村の４町村が各自で行政を行っていました。昭和31年には尾崎町、西鳥取村、下荘村が合併して南海町となりましたが、東鳥取村は合併には参加せず、そのまま東鳥取町になりました。

昭和36年1月、東鳥取町域である玉田山西山麓で水路整備が行われた際、古墳が発見されました。工事は直ちに中止され、調査団を結成して発掘調査に当たりました。現在でも行政発掘の多くは調査後破壊してしまいますが、東鳥取町はこの古墳の重要性を考え、封土の復元工事をして保存するという、当時では稀に見る進んだ文化財保護行政を行い、現在もこの古墳は泉南地方で実際に石室を見学することのできる、数少ない貴重な古墳となっています。

昭和47年、東鳥取町は南海町と合併して阪南町となり、その後、平成３年市制施行で阪南市となり現在に至ります。

阪南市でも独自に郷土の文化財を保護し、保存していくために平成12年11月、阪南市文化財保護条例を施行しました。当教育委員会は今後とも積極的な文化財保護活動を行っていきたいと考えております。

平成16年３月24日

阪南市教育委員会
教育長　川村一郎

例　　言

1．本書は阪南市自然田所在の玉田山2号墳の発掘調査概要報告書である。
2．調査は阪南市教育委員会が平成14・15年の国庫補助事業として計画し、生涯学習部生涯学習推進課三好義三、田中早苗、上野　仁、松本武志が担当して実施した。
3．本書内に示した標高は、T．P．であり、方位は既製の地形図などを使用したものを除いて磁北である。
4．調査に当たっては土地所有者など、関係者各位の理解と協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。
5．本書の執筆・編集は田中早苗が行った。また、実測図などの作成は、下記の調査従事者による。
6．本調査における記録は実測図、写真、カラースライドなどに保存されている。当教育委員会にて保管しているので、広く活用されたい。

（調査従事者）
宇沢克之、平坂博司、太田敏治、上野高男、中出源三、和田旬世、井上祥子、井上　進、島田万帆、中寺幸子

目　　次

第１章　調査にいたる経過　1
第２章　歴史的環境
　第１節　周辺の歴史的環境　2
　第２節　玉田山古墳群の歴史的環境　4
第３章　調査の成果
　第１節　外部施設　6
　第２節　内部施設　9
第４章　まとめ　１１

第１章　調査にいたる経過

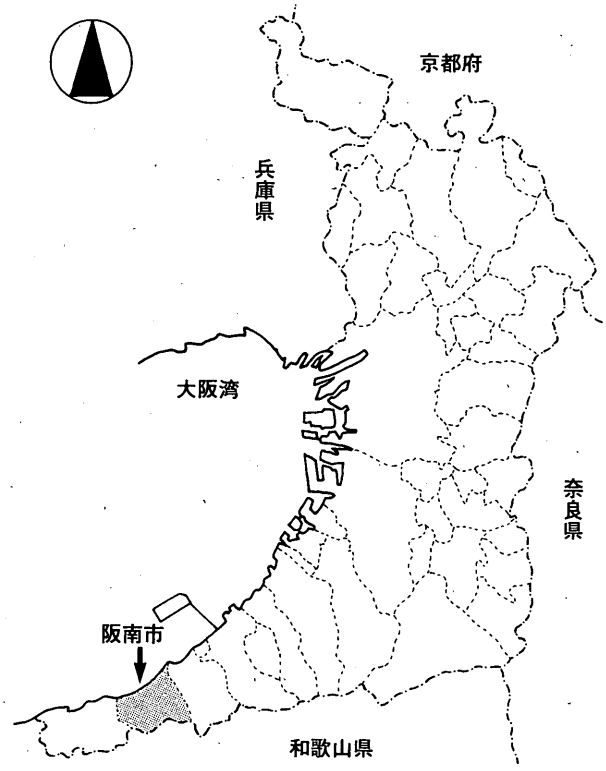
平成12年11月１日、阪南市でも独自に郷土の文化財を保護し、保存していくために阪南市文化財保護条例を施行した。平成13年度に「大願寺の絹本着色釈迦三尊図」と「瑞宝寺の木造聖観音菩薩立像」の２件を阪南市指定有形文化財に指定し、平成14年度には「自然田瑞宝寺の鉦講」を阪南市指定無形民俗文化財に指定した。

平成14年１月、玉田山古墳群を形成する「玉田山１号墳」が大阪府文化財保護条例によって史跡に指定された。

「玉田山２号墳」は昭和40年代前半に発見されたが、当時すでに天井石は除去され、側壁の石材の一部は周囲の土砂とともに石室内に流れ込んでおり、出土遺物も不明であった。

「玉田山１号墳」が大阪府文化財保護条例によって史跡に指定されたのを契機に、平成15年度の阪南市指定文化財の候補として、荒廃した状態にある「玉田山２号墳」を調査することとした。

以下に調査の概要を報告する。



第１図　阪南市位置図

第２章　歴史的環境

第１節　周辺の歴史的環境（第２図）

玉田山古墳群は男里川の支流である菟砥川と山中川が形成した玉田山丘陵先端に位置する。

玉田山丘陵は、以前よりいくつかの史料や天保４(1833)年６月に玉田山丘陵中腹に建てられた「玉田山碑」銘に記述がみられるように、『古事記』の垂仁天皇段の「鳥取之河上宮に坐して、横刀壱阡口を作らしめ・・・」や『日本書紀』の垂仁天皇39年10月条の「五十瓊敷命、茅渟の菟砥川上宮に居まして、劒一千口を作る・・・」と記載される五十瓊敷命の「かわかみのみや」に比定されていた。

また、この五十瓊敷命の墓である「宇度墓」は、『延喜式』に「宇度墓。五十瓊敷入彦命。在和泉国日根郡。兆域東西三町。南北三町。守戸二烟」と記載されているが、この宇度墓が近世期を通じて「玉田山」に比定されていたことも、いくつかの史料から知られるところである。しかし、宮内省は明治14(1881)年、岬町の「淡輪ニサンザイ古墳」を宇度墓と比定し、陵墓参考地として現在も宮内庁が管理している。

この他、大正年間、玉田山北麓の府道に面した畑地から鉄刀、刀子、円筒埴輪片が各１点出土したと伝わっている。なお、鉄刀は刃先を失っているが現存長89.9ｃｍ、刃部の幅は最大3.3ｃｍ、峰の厚さ0.6ｃｍの直刀である。円筒埴輪片は縦・横約6.0ｃｍ、断面台形の突帯を持つ。突帯の上下は横ナデ、体部は斜め刷毛目で厚さ0.6～0.9ｃｍである。

また、玉田山及びその周辺における近年の発掘調査の成果については、以下のとおりである。

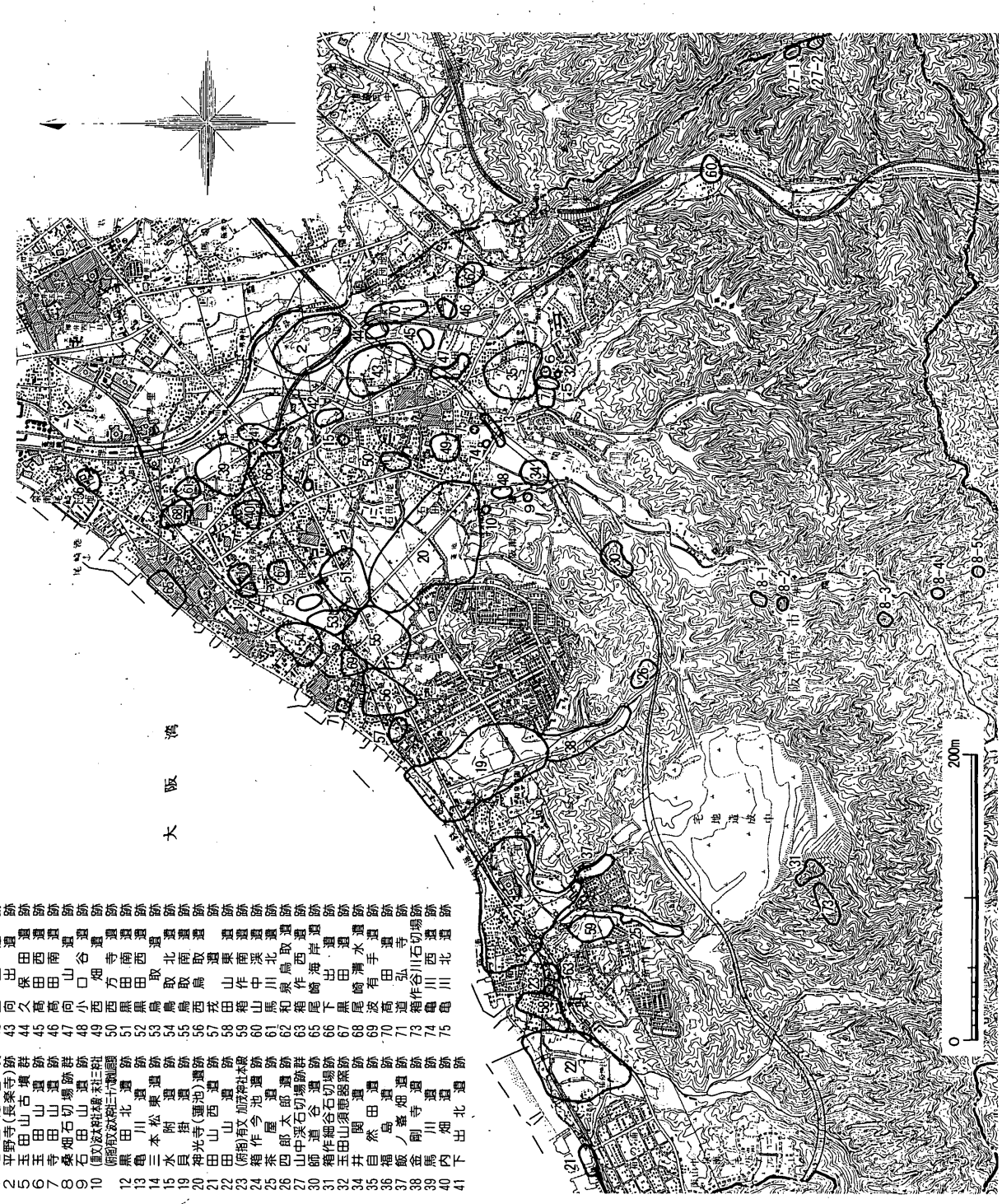
周知の埋蔵文化財包蔵地としては、玉田山古墳群をはじめ、標高77.5mの玉田山丘陵の山頂付近には玉田山遺跡が、丘陵中腹には玉田山須恵器窯跡が存在する。丘陵北部平地には自然田遺跡、西側には寺田山遺跡が存在する。

玉田山遺跡は、縄文時代の石器が採取されたことから、遺跡として周知されることとなった。昭和57(1980)年、丘陵頂上の公園整備事業に伴い、発掘調査が行われた。この調査では、箱式石棺を検出した他、いくつかの調査成果を得た。当事の調査担当者は、この箱式石棺からは、遺物は出土しておらず、その時期は「明確でない」としながらも、「玉田山丘陵自体が自然地形を利用した比較的大きな古墳であることが判明した」とし、さらに「玉田山を『宇度墓』と看做してよいのではないだろうか」ともしている。

玉田山須恵器窯跡は、若干の焼土が見られるのみで、詳細は全く不明である。

一方、平地に拡がる自然田遺跡は、縄文時代の石器が採取されており、十数回の小規模な調査は行われているものの、これまで古墳時代に関係するものは検出されていない。

寺田山遺跡は玉田山古墳群を望む段丘上に存在し、古墳を築造した集団の住居の存在が期待されていた。しかし、平成11(1999)年度に行われた、約4000㎡の調査では、弥生時代後期の竪穴住居、土坑墓などが検出され、土器とともにサヌカイト製石器と大量のフレークが出土したものの、古墳時代に直接結びつくような成果は得られていない。



第２図　阪南市埋蔵文化財分布図

第２節　玉田山古墳群の歴史的環境（第３図）

玉田山古墳群は玉田山丘陵西側山麓の１号墳と西側山腹に所在する２号墳の２基の古墳で構成される。

１号墳は昭和36年１月、水路整備に伴う採土が行われた際に発見され、11月から翌年の２月まで発掘調査が行われた。

墳丘は直径約11.5m、高さ3.9mの円墳で、墳裾で土留め列石が巡り、埋葬施設は両袖式の横穴式石室である。玄室の規模は長さ2.90m、幅1.68m、残存高約2.00m、羨道は残存長3.50m、幅0.97m。玄室床面は２面存在し、下層からはガラス製丸玉及び小玉、琥珀製棗玉、鉄鏃が、上層からは金環、銀環、須恵器などが出土した。上層の埋葬時期は６世紀末から７世紀初頭である。下層は遺物からは特定できないが、６世紀後葉と推定される。

昭和42年４月、「玉田山上方下円墳」として、大阪府古文化紀念物等保存顕彰規則により史跡に指定されたが、平成14年１月に大阪府指定文化財指定史跡に指定されたとき、「円墳」に修正された。

２号墳の石室は以前より両袖式の横穴式石室が露出していたようで、天井部と側壁上部がすでに失われ、当初の高さは不明である。床面には土砂が溜まり、出土遺物も不明であった。

昭和55年発行の『淡輪磯山古墳群』では、「直径約10mの円墳で、１号墳に比べて石材加工、構築が粗雑であることから、１号墳よりやや後の築造と推定される。」と記載がある。

参考文献

古事記

日本書紀

「玉田山古墳発掘調査概要」　玉田山古墳発掘調査団　1961

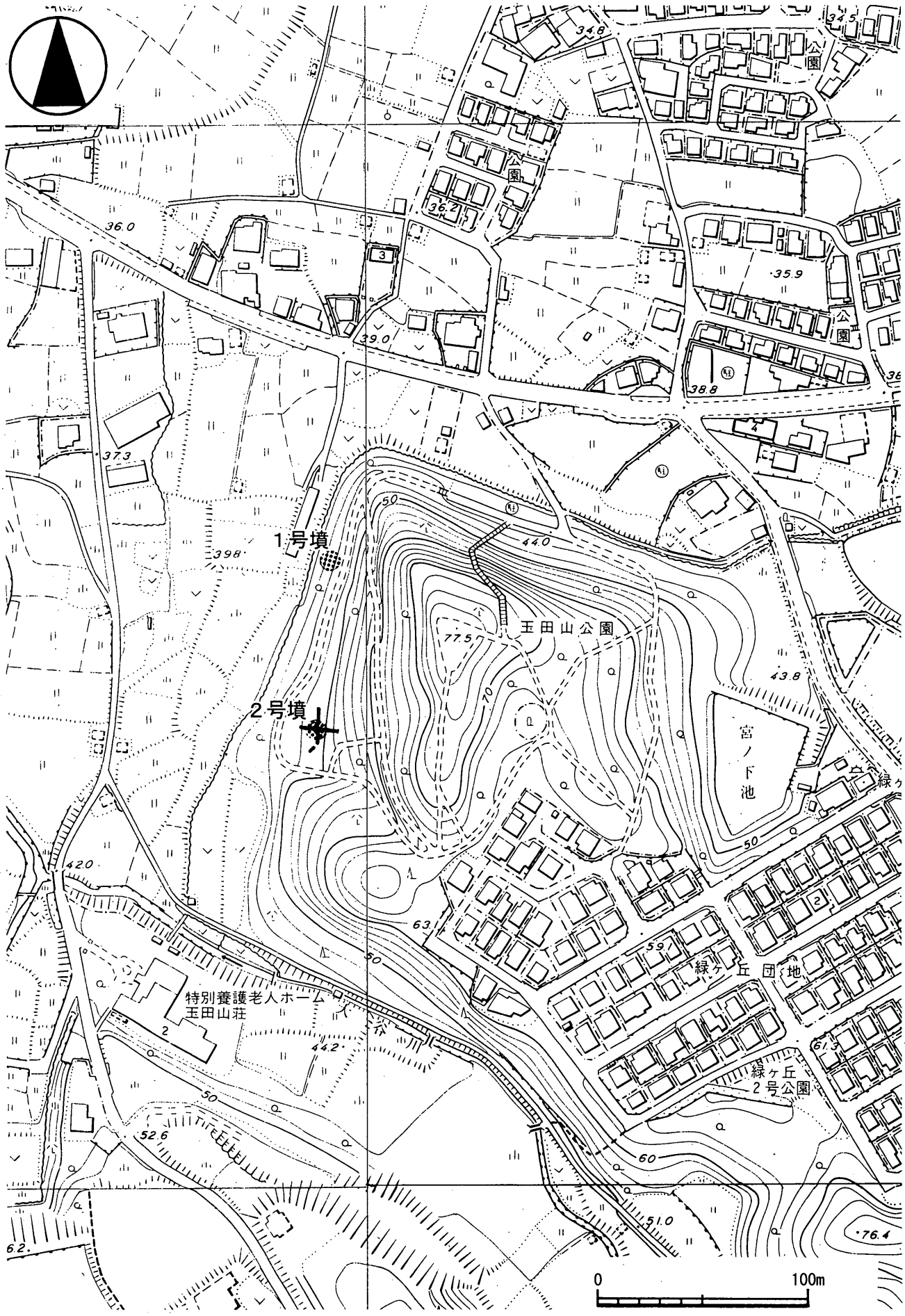
郷土の文化財めぐり⑪「玉田山上方下円墳」　大阪府教育委員会月報　第18巻第３号　1966

大阪府泉南郡阪南町自然田地区埋蔵文化財分布調査報告書　―大正不動産KK開発予定に伴う―　財団法人大阪文化財センター　1973

「淡輪磯山古墳群」　西山要一　1980

阪南町埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ「玉田山遺跡発掘調査報告書―大阪府泉南郡阪南町自然田所在―」　阪南町教育委員会　1982

阪南町史　上巻　阪南町史編さん室　1983



第３図　玉田山古墳群位置図

第３章　調査の成果

第１節　外部施設（第４・５図）

２号墳は玉田山丘陵の西斜面山腹の傾斜が緩やかになった標高約50mに位置する。

調査は墳丘の形、規模及び石室の構築状態を確認するため、等高線による測量と石室に対して十字に幅１mのトレンチを４ヶ所と、それを補助するトレンチを１ヶ所設定して実施した。

第１層盛土、第２層腐葉土、第３層淡黄褐色土、第４層暗黄茶色風化礫混粘質土、第５層褐灰色粘質土、第６層淡褐灰色粘質土、第７層淡茶黄色粘質土、第８層茶黄色風化礫混土の地山である。第１～５層は後世の堆積で、第６・７層と裏込の淡灰褐色粘土が古墳築造に伴うものである。

a. 西トレンチ

石室の山裾側に残存する羨道の端から長さ6.0m、幅１mのトレンチを設定して調査を行った。

古墳築造時の土層は検出されず、地山上に近世期と思われる第４層、第５層の堆積が見られた。

トレンチ内では墓道のようなものは検出されなかった。

b. 南トレンチ

石室の南に長さ5.8m、幅１mのトレンチと、障害物でトレンチが延長できなかったため、南西に長さ3.6m、幅１mのトレンチを設定して調査を行った。

埋土は第２～３層、第７層、第８層で、第６層は削除された可能性があり、見られなかった。

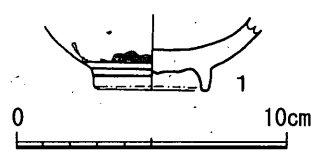
石室は地山を石室床まで掘り下げた後石材を据え、淡灰褐色粘土で裏込めした後、第７層を盛っている。

また、トレンチの北側の第７層中に集石が確認されたため、一部トレンチを拡張して確認したが、人工的な配列は見られなかった。おそらく不必要石材を廃棄したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

c. 北トレンチ（第７図）

長さ9.5m、幅１mのトレンチを設定して調査を行った。

埋土は第１～３層、第６層、第７層、第８層である。石室の床は封土の地山とほぼ同じレベルで、石



第７図　出土遺物

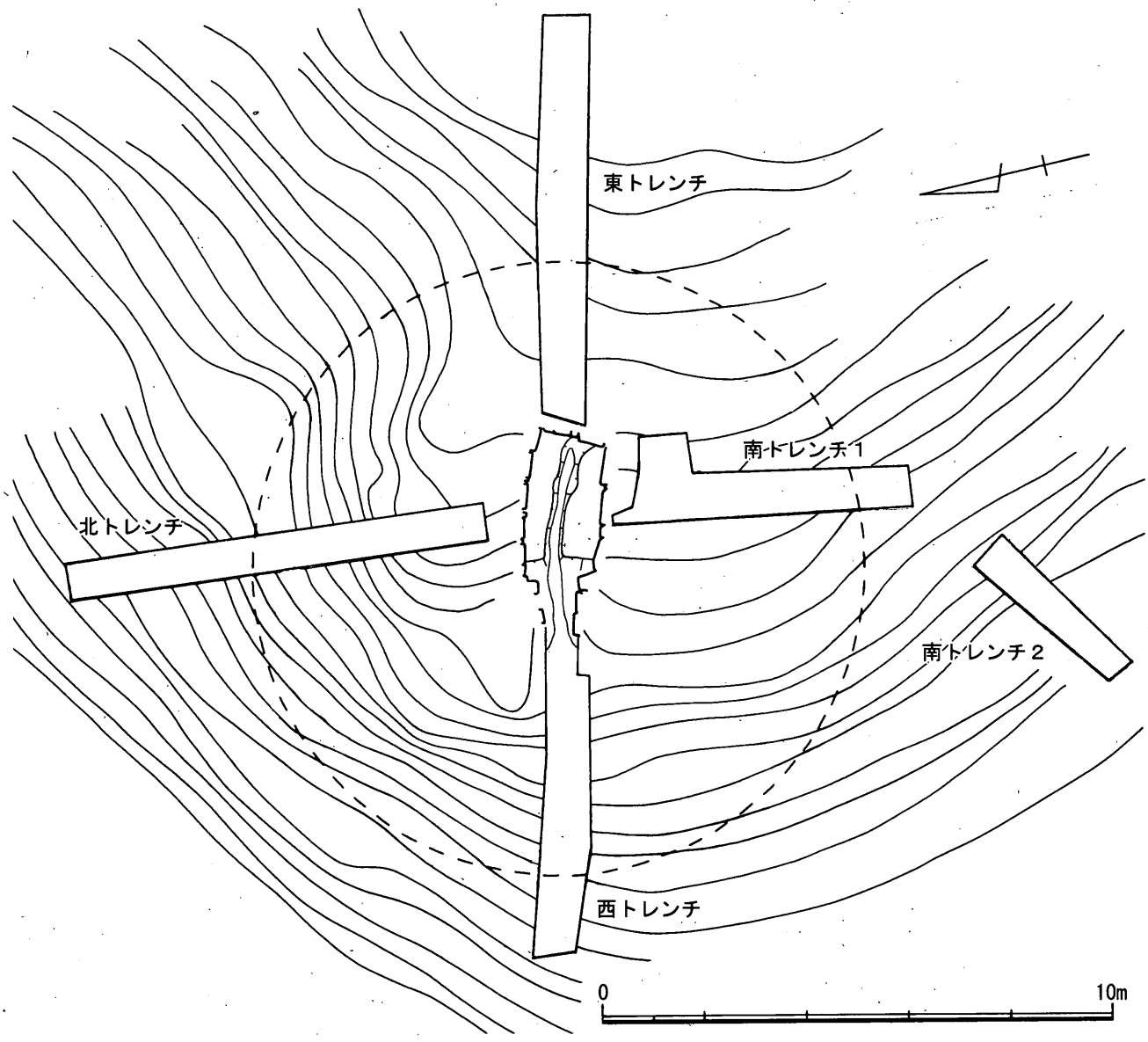
材を据え淡灰褐色粘土で裏込めを行い、第６・７層を盛っている。遺物は第３層から１の磁器椀が出土した。口縁部は欠損しているため、高さは不明であるが、残存高2.8ｃｍ、底径4.2ｃｍ。波佐見焼の染付椀で、近世期のものである。

d.東トレンチ

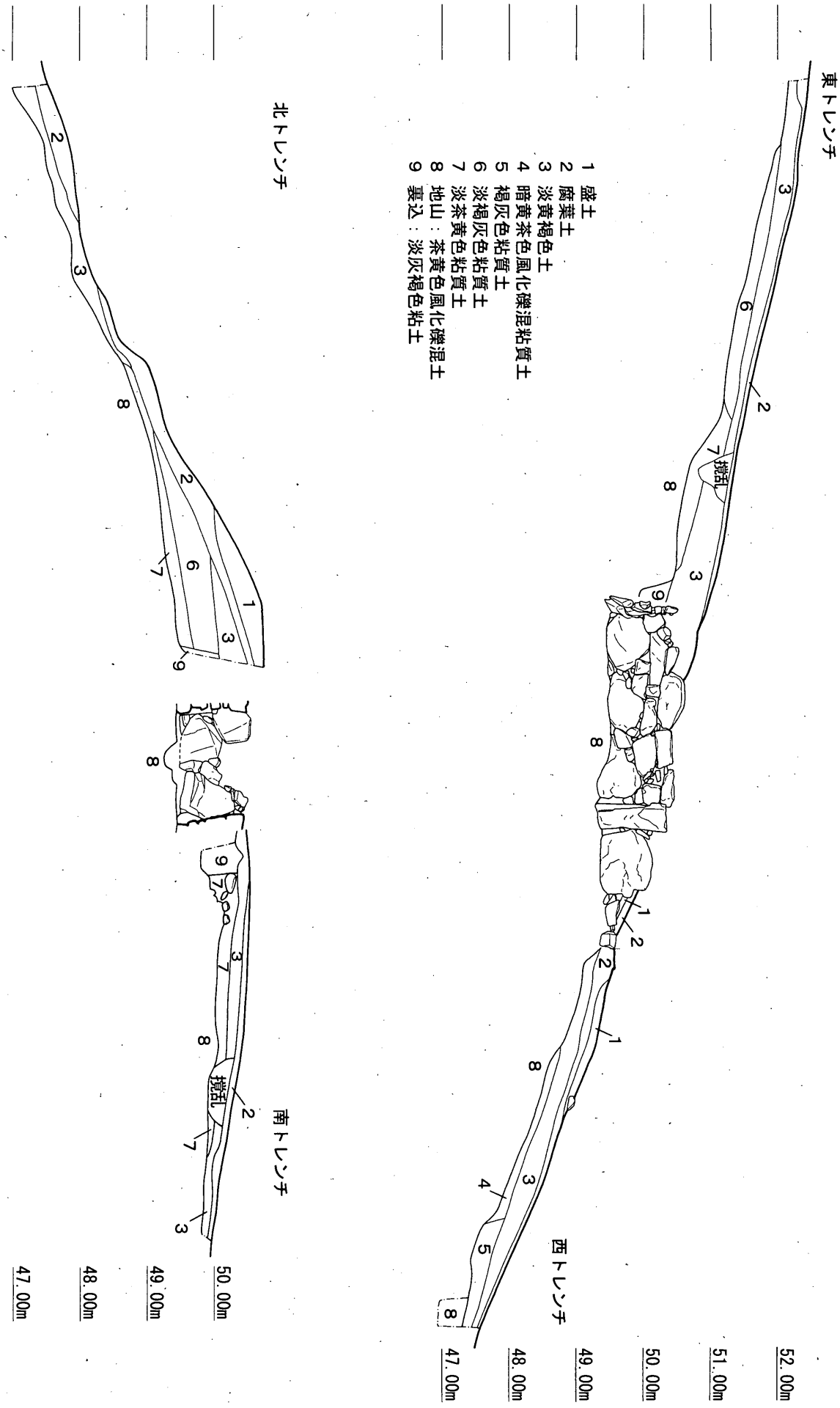
トレンチの山側に長さ7.6m、幅１ｍのトレンチを設定して調査を行った。

埋土は第２～３層、第６層、第７層、第８層地山である。

石室は地山を石室床面まで掘り下げた後、石材を据え淡灰褐色粘土を裏込めし、その後、第６・７層を盛っているのが確認できた。



第４図　トレンチ位置図


東トレンチ
1 盛土
2 腐葉土
3 淡黄褐色土
4 暗黄茶色風化礫混粘質土
5 褐灰色粘質土
6 淡褐灰色粘質土
7 淡茶黄色粘質土
8 地山：茶黄色風化礫混土
9 裏込：淡灰褐色粘土
撹乱
西トレンチ
52.00m
51.00m
50.00m
49.00m
48.00m
47.00m
北トレンチ
南トレンチ
50.00m
49.00m
48.00m
47.00m
0
5m

第５図　トレンチ断面図

第２節　内部施設（第６図）

両袖式の横穴式石室で以前より天井部と側壁上部が失われ、当初の高さは不明である。

ａ．玄室（第８図）

長さ3.15m、幅1.50m、残存高1.20mである。側壁は基底部に比較的大きな石材を用い、上部は小さい石を横置きしており、その隙間には比較的小さい石を内部よりはめ込んでいるが、非常に雑な積み方である。奥壁は大きく崩落しているため持ち送りの角度は不明である。石材は羨道とも和泉砂岩である。

玄室床面には崩落した側壁石とともに大量の土砂が溜まっていた。

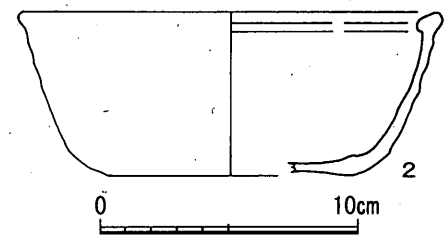
調査は玄室の長軸と直角にセクションを残して、掘り下げていった。

土層は上から淡黄褐灰色粘質土、茶黄色粘土、茶黄色風化礫混土の地山である。東北角の淡黄褐灰色粘質土から２の土師質土器が出土した。口径16.0ｃｍ、器高6.3ｃｍで、胎土は粗く砂粒が多量に混入している。近世期の植木鉢と思われる。

地山上面で敷石は一切検出されず、中央に長軸と平行して幅0.33m、深さ0.15mの排水溝が設置されていた。埋土は淡黄褐灰色粘質土である。

排水溝に伴う石組など一切確認できなかった。

副葬品や石棺片、釘などの棺材は検出されなかった。



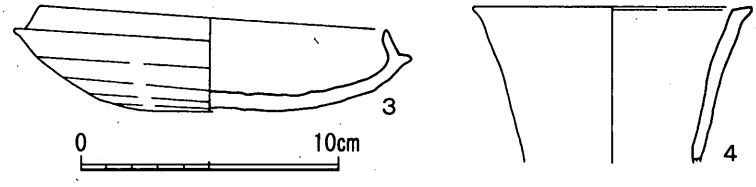
第８図　出土遺物

ｂ．羨道（第９図）

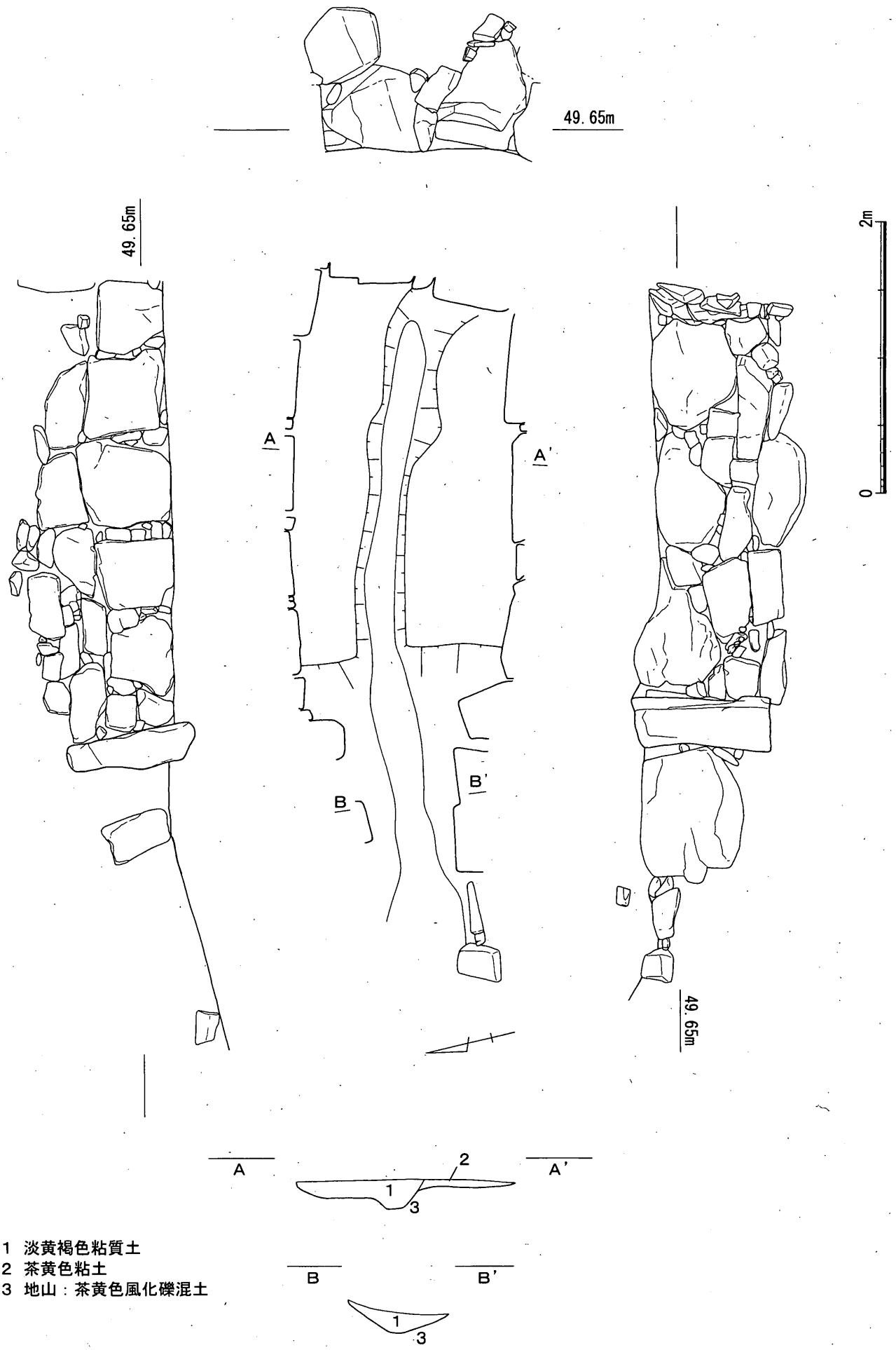
残存長1.90m、幅0.62m、残存高0.75mである。玄門に当たる部分は両側とも大きな石を縦置きしている。側壁は北側では樹木の影響で旧位置にあると思われるものは１石で、南側も数個残るのみである。遺物は羨道北側の側壁石が欠損落した壁面から須恵器が２点出土した。３は７世紀初頭の須恵器坏身である。口径13.4ｃｍ、器高4.1ｃｍで、焼成は良好である。４は須恵器壷口縁部である。口径10.6ｃｍ、残存高6.1ｃｍで焼成は良好である。

羨道は長軸に直角にセクションを残して、掘り下げていった。埋土は淡黄褐灰色粘質土である。床面は側壁石の基底部より0.42mほど下がっていることから、削平されたものと思われる。

遺物は出土しなかった。



第９図　出土遺物



1 淡黄褐色粘質土
2 茶黄色粘土
3 地山：茶黄色風化礫混土

第６図　石室実測図

第４章　まとめ

玉田山２号墳の墳丘は、東南から北西に向かって低くなる斜面をＬ字状に削り取り、広めに床面を整えて石材を据えていったようである。基底部には大きめの和泉砂岩を石材として据え、淡灰褐色粘土で裏込めを行い、第７層淡茶黄色粘質土、第６層淡褐灰色粘質土で墳丘を築いていったようである。今回の調査では土留列石のようなものは一切検出されなかった。

１号墳の玄門から墳丘最下縁の土留列石までの長さは約5.3mで、玄室長2.9mとの比率から推定すると２号墳の玄門から墳丘最下縁までの長さは約5.7m。墳丘最下縁と等高線から直径は約12.0mと考えられる。墳丘や石室の高さは大幅に削平されていて不明であった。

床面は直上まで近世期の土層が堆積しており、副葬品や敷石は確認できなかったため、埋葬時期や埋葬回数は不明であるが、羨道北側の側壁石が欠損落した壁面から須恵器が出土した。石室の時代などからみて２号墳に関係する遺物とみて間違いないであろう。

なお、この調査を受け、平成16年１月21日に「玉田山２号墳」は阪南市文化財保護条例に基づき、阪南市指定史跡に指定された。

	１号墳	２号墳
墳　　形	円墳	円墳（推定）
規模（直径）	11.5m	12.0m（推定）
石　　室	両袖式横穴式石室	両袖式横穴式石室
玄　室　長	2.90m	3.15m
玄　室　幅	1.68m	1.50m
玄　室　高	2.00m（残存高）	1.20m（残存高）
羨　道　長	3.50m	1.90m（残存長）
羨　道　幅	0.97m	0.62m
玄門から墳丘最下縁の長さ	5.30m	5.75m（推定）
時　　代	６世紀後葉～中頃	７世紀初頭

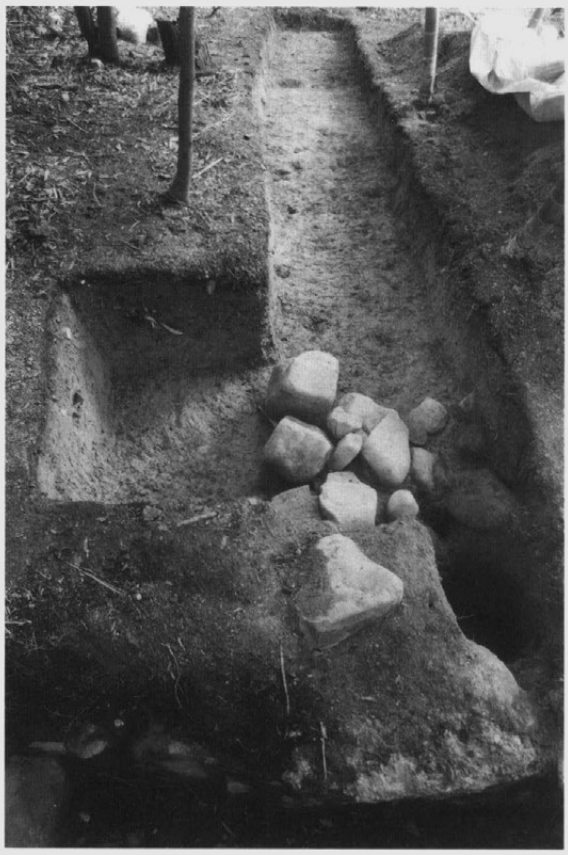
墳丘全景（西より）

北トレンチ拡張部全景（北より）

北トレンチ　南側断面

写真図版二

南トレンチ２全景（北より）



南トレンチ全景（北より）

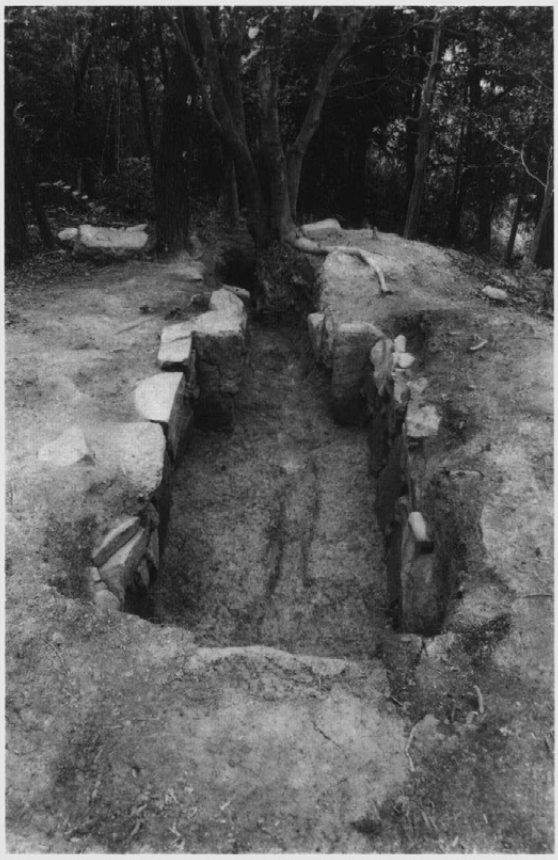
南トレンチ　西側断面

東トレンチ拡張部全景（東より）

西トレンチ全景（西より）

写真図版四

玄室（西より）

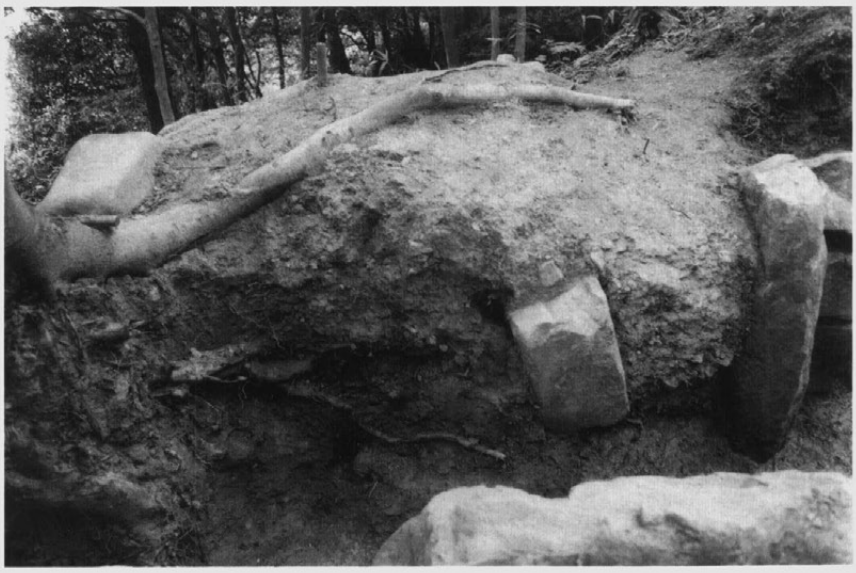


石室（東より）

石室（西より）

玄室　北壁

玄室　南壁



羨道　北壁

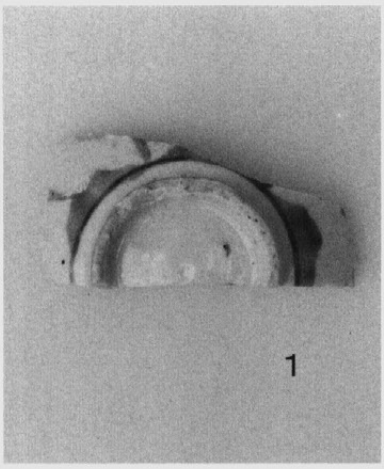
写真図版六

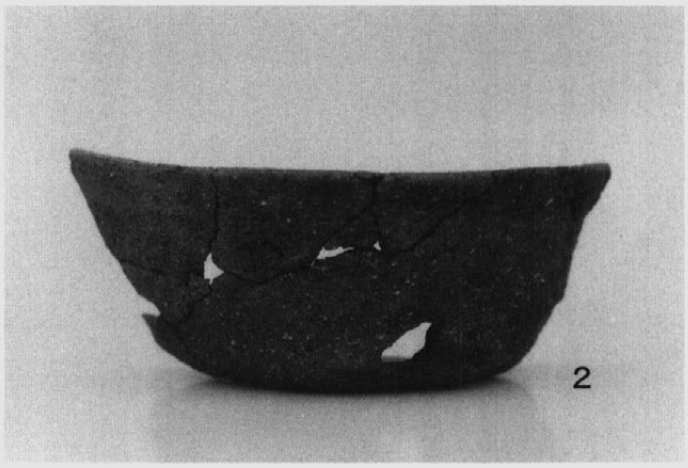
玄室　北壁

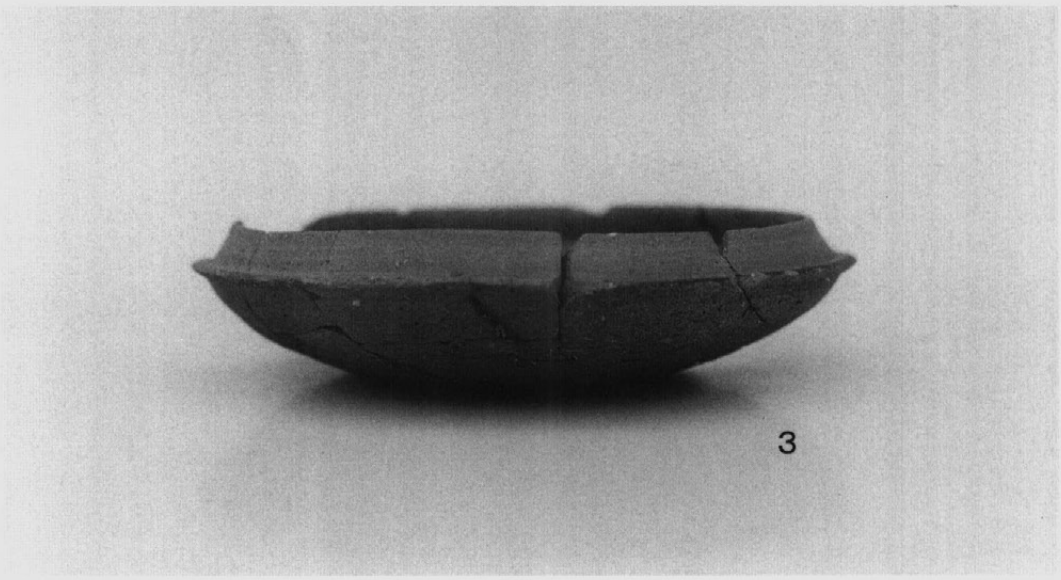
羨道　南壁

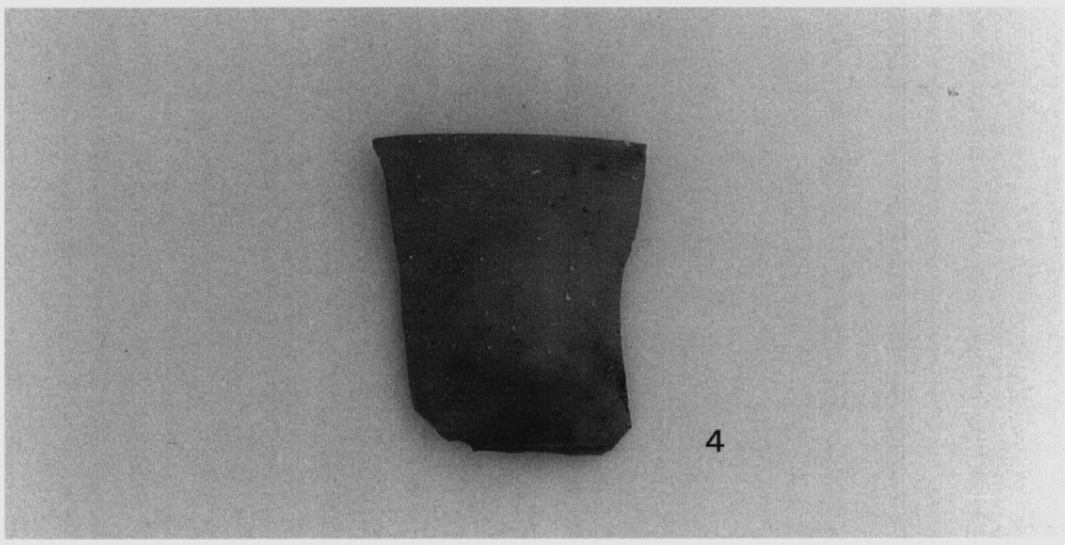
玄室内セクション（西より）

写真図版七









報告書抄録

ふりがな	たまだやま２ごうふんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	玉田山２号墳発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	阪南市埋蔵文化財報告
シリーズ番号	３４
編著者名	田中早苗
編集機関	阪南市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課
所在地	〒599-0292　大阪府阪南市尾崎町３５－１　TEL 0724-71-5678
発行年月日	2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号	°′″	°′″		㎡	
たまだやま２ごうふん 玉田山２号墳	はんなんし 阪南市 じねんだ 自然田	27232	5	34° 20′ 11″	135° 15′ 25″	2003.1.30 ～10.10	41.7	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉田山２号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	須恵器・土師質土器・磁器	

阪南市埋蔵文化財報告 34

玉田山２号墳発掘調査報告書

２００４年３月

発　行：阪南市教育委員会生涯学習部
生涯学習推進課
大阪府阪南市尾崎町35の１
印刷者：三和印刷株式会社